研究発表会　詳細レポート　（坂本昭文）

引きこもり青年などの特徴（本人及び保護者からの聞き取り、観察などによる）

１、他人との出会いや交流が苦手。人目を避ける。他人がどう思っているのか気になる。

２、スマホ等で世間とつながっており外部情報は入っている。

３、情報に反応はするが、深い読み込みや吟味までには至らず、偏った見方や思い込みがある。世間を敵に見立てて、自らの立ち位置を確保していることがある。

４、夜型で早起きは苦手。家族との会話も少ない。孤立感を持ち負のスパイラルに陥っている。

５、食生活も菓子パンなど簡単なもので済ませる傾向でアンバランス。

６、学齢期にいじめに遭ったり、不登校などの経験を持ち、社会への適応につまずいた経験を持つ人が多い。

７、勤務経験があっても、人間関係で失敗している人が多い。

８、何らかの疾病や発達障害などを有する場合も少なくない。通院、服薬の人が多い。

９、長期にわたる引きこもり者で言葉を失っている場合がある。その為、思いが先行し前のめりになって会話が成立しない場合がある。

１０、目で見て、耳で聞いて、頭で考えて、心に従って行動する流れが途中で分断し、又は機能は独立して働くものの、全体の調和が取れずに誤解を受ける事がある。

１１、自分ではこのままではいけないと思っているが、具体的にどうしたら良いか分からない。相談へのアクセスも知らない人が多い。

１２、ひきこもっている状況を知られたくない、知らせたくないと思っている本人や家族が多い。特に本人は対人恐怖があったり不安があったりして、現在の生活に困っていない人の場合などは継続した相談支援さえ始められない場合も多い。

一般的に上記のような特徴を持つ若者支援は難しい。特に家から出かけて「いくらの 郷」へ通うということが、最初に乗り越えなければならないハードルと思われる。
精神科医師によると「首に縄をつけて引っ張るような事をしても長続きしない。本人が行ってみたいと思うように仕向け、行って見たかったら連れて行ってあげる」といった、気の長い対応が必要であるとの事であった。従ってここの部分は家族、医師、保健師、福祉担当者等の連携が特に必要である。

対象者

学校や社会にうまく馴染めていないと感じていたり、社会への第一歩を踏み出せずにいる若者や、社会人としての経験があっても、途中で病気や人間関係、事故などで挫折し、あるいは失業するなどの原因で、再び社会へ復帰できずに、引きこもり状態になっている若者を対象としている。又、自分が何をしたいのか、社会での目標が見つからない若者も

対象者に加えている。

指導の基本的な方針

１、本人に寄り添う。利用者の意思・人格を尊重し協働する。利用者の立場に立ったサポートを行う。

２、自然豊かな生産現場での活動を中心として、汗をかき代謝を良くし体力をつける事により、何事にも自信を持って前向きな気持ちで向かって行く人を目標とする。

３、地域・家庭との結びつきと、保健・医療・福祉などとの連携の中で解決を図る。加えて各種団体、法人などの協力も受け入れ、地域の総力を挙げてサポートする。

４、コミュニケーション能力を高めるため、様々な事例を話題として会話の時間を十分に取ると共に、社会情勢を伝え社会常識などを身に着けるようにサポートする。

５、地域社会とのつながりの中で解決を図る。地域住民の加工所利用を通じて、自然な形で一般社会との交流につなげる。

６、明るく楽しくなければ長続きしないため、笑いが絶えないような運営を心がける。

作業や活動の基本

田舎の大自然の中で体を動かし、汗をかき、少人数の共同作業の中で、誰もが持っている自然回復能力に働きかけ、自然人としての目覚めを促し、社会参加や社会復帰を目指す。

基本的な活動

交流活動や生産活動機会の提供

社会との交流機会の提供

生活に関する相談及び助言

地域活性化を目指した各種事業への取り組み

活動の詳細

農業生産活動―水稲栽培、大豆栽培、草刈り、機械器具の使用法研修

林業生産活動―立木伐倒、玉切り、割木で薪生産、竹林整備、竹細工

生き物飼育活動―沢ガニ、日本ミツバチの飼育、観察

各種加工品製造活動―梅の加工、タケノコ加工、つるし柿の生産、マタタビ酒の生産

自然ふれあい活動―清流の沢登り、林道散策、キノコ採り、ツリーハウス下地整備

交流活動―ボランティアと交流会、集落活動への参加、地区の収穫祭参加、環境整備参加、移住定住ツアーとの交流

園芸活動―ナス、芋、ピーマンなど家庭菜園での野菜作り、花づくり

瞑想など座禅体験―座禅、講演会で講和の拝聴

木工活動―日本ミツバチの待ち箱制作、梅割り器制作、イモ洗いや発電用水車の制作

資格取得活動―狩猟免許(ワナ猟)、介護職員初任者研修
修学旅行、他施設交流（機織り）

成果

１、社会復帰の前段に用意した職場体験実習に取り組み、本人、使用者共に満足し、実習期間終了後も継続してその職場で働く事となった。
２、地域の集会などで挨拶ができて、誰とでも会話が出来るようになった。
３、地域住民から可愛がられ、地域のコミニュテーの一員として溶け込むことが出来た。
４、アフターの体力測定を終えていないが、当初と比して確実に体力がついた。
５、良く眠れるようになり、医師と相談し睡眠薬の服用をやめる事が出来た。
６、生きる事や仕事に対しての意欲が湧いて、何事も前向きで捉えられるようになった。
７、家族との会話が復活して家庭環境が明るいものとなり、将来の夢を描く事が出来る様になった。一日の出来事が食卓の話題となる事が多くなった。
８、経験者として後進の研修生にアドバイスが出来、当該事業の継続性に希望が出来た。
９、狩猟のワナ猟免許、介護職員の初任者研修資格取得が出来た。学んだことが社会復帰の役に立ち、生きた経験となった。知的障がい者への傾聴、有害鳥獣被害農家への共感、野生動物保護との調和から、自然への洞察などが深まり、職場や地域で話題となる会話に参加できるようになった。
１０、9 年間も引きこもっていた人が、いくらの郷の活動に誘発されて、自らの意志で通所し始めた。活動そのものの力と評価する。

課題

１、本人の状況を確認しながらじっくりと話を聞き、タイミングよく「いくらの郷」の情報提供と、「出かける気持ち」に働きかけていく事が大切で、決して焦ってはならない。そのようなソシアルワークの出来る人の確保が課題である。
２、いくらの郷へ通い始めても、何らかの原因でつまずきそうになる場合もある。関係者で連携しながら利用者の生活全体を見守り、状況の推移を関係者が共有してサポートする事が大切である。
３、生産現場では多様な利用者に対応できる活動の種類があるが、何処でも同じことが出来るわけではない。それぞれの地域で工夫して活動を作って行かなければならない難しさがある。
４、現場では利用者の多様な状況に応じて活動を保証しなければならない。地域活性化事業などとの連携が必須であるが、関係者はそれぞれの分野に跨っており、連携の妨げとなっている。現場では国の政策に横串を入れて整合を取らなければならない。
５、利用者の中には生活困窮家庭の若者もいるが、そうではない家庭の若者も存在する。対象者の把握が難しい原因となっている。生活困窮者について利用料の減免制度がな

い。

６、誰でも自然豊かな生産現場での農林業作業が向いている訳ではない。それぞれの特性に合わせたサポートの方法があると思われるがマニュアルもない。情報も少ない。

７、利用者同士の相性も人数、構成、年齢も大切な課題である。

８、サポーターの幅広い分野の人材の確保、マンパワーのネットワークが必要である。

９、施策として制度化の具体的な推進が急務である。

１０、事業は継続しなければならないが、社会福祉法人の社会福祉貢献事業での運営では限界がある。運営経費を利用料で賄う事とすれば、ひきこもりで所得がない青年は利用できない。法人の寄付などを受け入れて運営経費に充当しているが、国や県の政策としての位置付けが課題である。

１１、ひきこもりを恥ずかしい事と思わずに気軽に相談出来たり、支援の場に通所出来る様に社会的に認知される事も課題である。

１２、少子高齢化、人口減少により自然豊かな農山村集落は消滅の危機的状況にある。地域の理解と協力が無ければ成果は望めないが、地域が疲弊してきている。地域社会そのものを同時に元気にする手法でなければ、いずれ行き詰ると考えられる。

データ

	年齢	性別	同居者	引きこもり期間	通所期間	医療	摘要
A	20 代	女	無	無し―情緒不安	2018.4～７月	無	８月就労
B	30 代	男	有	１・５年	５月～	精神科	12 月職場体験実習
C	20 代	男	有	１・５年	５月～	精神科	12 月職場体験実習
D	50 代	男	無	９年	10 月～	精神科	通所中
E	20 代	男	有	３・５年	12 月～	無	通所中